

泌尿器科

岡 聖次

平成 22 年（平成 22 年 1 月 1 日～12 月 31 日）の入院患者総数 599 名（重複入院を含む）のうち 373 名（62.3%）は癌と診断された患者であり、その内訳は腎癌 41 名、腎盂・尿管癌 21 名、膀胱癌 146 名、前立腺癌 150 名、精巣腫瘍 8 名、その他 7 名である。

当科では、診療においては「十分なインフォームド・コンセントを行った上で、EBM に基づいた診療を行うこと」をモットーにし、癌患者に対しても全例「がん告知」を行い、病状や治療方針等について時間をかけて十分な説明を行っている。また不幸にして癌の進行により疼痛で苦しむことが予想される患者に対しては、早期の段階から院内の緩和医療チームに協力を依頼し、可及的に苦痛を取り除くことを心がけている。

手術的治療においては「手術は小さな創で」をモットーにし、腎癌や腎盂・尿管癌に対する腎摘除術は腹腔鏡下手術か 6-7cm の皮膚切開で行うミニマム創手術のどちらかで、腎部分摘除術は 4-7cm の皮膚切開で行うミニマム創手術を、前立腺癌に対する前立腺全摘除術は 6-7cm のミニマム創手術を内視鏡補助下で行っている。良性の副腎腫瘍に対する副腎摘除術は腹腔鏡下手術を原則としている。

限局性前立腺癌患者に対しては、当科では手術のみを勧めるのではなく、年齢や ADL、病状などを鑑みて、放射線療法（組織内、体外照射）あるいはその他の治療法も提示し、最終選択は患者側に委ねている。平成 22 年は当院では治療が出来ない強度変調放射線療法（IMRT）の適応患者が比較的多く、前立腺前立腺全摘除術は 15 名に行ったが、組織内放射線照射（HD-RT）患者数は 11 名と前年（21 名）に比べ大幅に減少した。

尿路結石（腎結石、尿管結石、膀胱結石）症患者に対しては、症例に応じてリソトリプター S（ドルニエ社）を用いた ESWL 治療や経皮的腎砕石術（PNL）、経尿道的尿管砕石術（TUL）や経尿道的膀胱砕石術などを行っている。また、尿路結石症の診療においては、従来同様に再発予防にも心がけ、再発原因の一つとして重要な原発性副甲状腺機能亢進症の発見にも力を注ぎ、副甲状腺の手術も行っている。

ホルモン抵抗性前立腺癌に対するドセタキセル治療や進行性腎細胞癌に対する分子標的薬、さらには尿路上皮癌に対する GC（ジェムシタビン+シスプラチン）療法など、新規で有効な治療法は積極的に取り入れている。ドセタキセル治療については、治療導入時は入院下で行っているが、多く患者は 2 コース目以降外来化学療法室で治療を行っている。

外来診療においては、癌診療を中心とした急性期病院であるという当院の機能的役割に準じ、慢性疾患で薬剤投与が中心となっている患者に対しては、可能な限り紹介元での診療を依頼するなどして、病診連携の強化に努めている。

【2010 年度研究発表業績】

B-4

小森和彦、宮後直樹、鯉田容平、原田泰規、安永 豊、岡 聖次：再燃前立腺癌に対するドセタキセル療法の臨床的検討。第 98 回日本泌尿器科学会総会、盛岡、2010 年 4 月

宮後直樹、鯉田容平、小森和彦、原田泰規、安永 豊、岡 聖次、児玉良典：骨転移を契機に発見された精嚢原発低分化型神経内分泌癌の一例。第 48 回日本癌治療学会、京都、2010 年 10 月

B-6

宮後直樹、王 聡、小森和彦、原田泰規、安永 豊、岡 聖次、児玉良典：前立腺異所開口を伴う上半腎と前立腺を一塊にして摘除した前立腺癌の1例。第212回日本泌尿器科学会関西地方会、西宮、2010年9月

安永 豊、宮後直樹、小森和彦、原田泰規、岡 聖次：進行性腎細胞癌に対する Tyrosine Kinase Inhibitor 治療薬2年間の治療成績。第62回日本泌尿器科学会西日本総会、鹿児島、2010年11月

王 聡、宮後直樹、小森和彦、原田泰規、安永 豊、岡 聖次、児玉良典：膀胱 Solitary fibrous tumor の1例。第213回日本泌尿器科学会関西地方会、大阪、2010年12月

B-8

岡 聖次：「排尿障害の病態と治療～前立腺肥大症/過活動膀胱を中心に～」大阪府病院薬剤師会講演、2010年4月

岡 聖次：「内科診療・健診での泌尿器系癌の発見を目指して」RTS 勉強会講演、2010年7月

岡 聖次：「病診連携による泌尿器癌発見の道標」生野区医仁会スモールミーティング、2011年2月